

【特別インタビュー】

熊谷圭知教授とお茶大地理学教室

熊谷圭知先生がお茶大地理学科に着任してから30年ほどが経ち、今年度で定年退職されることになった。この間のお茶大地理学科は、教員、教育組織、院生室に大きな変化があったが、その記録があまり残されていないことに気がついた。そこで、本誌に特別コーナーを設けて、この間の地理学教室の変化について熊谷先生から話をお聞きしたいと考えた。さかのぼれば、33号(1992年)のスーザン・ハンソン教授講演、50号(2010年)のジェンダーと地理学の特集、54号(2015年)のドリーン・マッシー教授のお茶大セミナーに続く、特別コーナーである。熊谷先生が着任する前の地理学科は教員養成を前提としていて、自然地理・人文地理・地誌の3講座からなる伝統的な地理学科であった。ただ、バブル崩壊後の1990年代に教養課程の改組、大学院の重点化、学力の多様性などが言われて全国の大学および地理学科が再編を迫られた時期でもあった。

地理学コースOGの2人(倉光ミナ子、久島桃代)と共に、2020年2月13日、本学文教育学部7階地理学教室(東京タワーの上半分が見える)の地図室で、弁当を食べお茶を飲みながら、気軽な雰囲気の中でインタビューを行った。以下、括弧内は編集注である。

水野：日本の地理学界の中でお茶大は独特の位置を占めていると私は思っています。つまり全国の国立大学の中で女性教員の比率を高めるような機運が現在生まれていて、それに応えられる大学がお茶大と奈良女子大でした。現在全国の大学にお茶大地理学教室出身の女性教員が、教え方にもよりますが20名前後いて、その多くは社会地理学ないし外国研究の分野で活躍しています。そのOGたちが在籍していた時の教員だったお一人として、着任以来のお茶大での教育についてどう思っているか話してください。

熊谷：そうですね。じゃあ、赴任の経緯のあたりから話をしますと、まず地理学科の地誌学講座に着任しました。地誌学講座というのは、お茶大の地理学科は自然・人文・地誌の3講座からなる学科で、自然はもちろん自然地理学者、人文は人文地理学者なんですけど、地誌も自然と人文の1人ずつという構成でずっと来ていた。

ところが僕の前任者は式(正英)先生なんですけど、僕を採る時に、自然地理(の教員)を本当は慣例でいえば採るはずのところだったのを、学生の志向性というと

ころを勘案して人文地理(の教員)を採った。まあ、ここが最初のお茶大地理学科側の判断というか決断だったというわけですね。それで私に声がかかった。そのころは公募ではありませんので、まあ一本釣りのようなかたちで声がかかり、私が赴任したということになります。

水野：それは1992年？

熊谷：92年の4月に赴任しています。で、まずは地理学科の側にそういうニーズがあったというか。地理学科の教育のあり方っていうのを積極的に変えていこうというような、まあ、合意があってその上で僕の人事がなされたということになると思います。

水野：当時の自然地理と人文地理の関係ってどんな感じだったですか。

熊谷：うん、地理学科という枠の中で自然地理の人がいて人文地理の人がいる、という感じでしょうね。ちなみに当時のメンバーといえば、自然地理が気候の田宮(兵衛)先生と地形の杉谷(隆)先生、それから人文地理学講座が井内(昇)先生と栗原(尚子)先生、そして地誌学講座が内藤博夫先生、そして私に加わったという、そういう構成です。

倉光：それでは、井内先生の後に来られたのが千歳先生？

熊谷：いや、千歳(寿一)先生は情報学のポストで来てるんですね。

水野：別のポストなんです。さっき言ったのは6人ですよ。7人目で千歳先生が来るわけです。

倉光：それでは井内先生の後が、内田先生なんですか？

水野：そうなりますかね。

熊谷：人文地理学講座の後任としては内田(忠賢)先生。もう一つ、ついでに言っておくと、政治学のポストというのがありまして、一般教育の政治学のポスト。史学と

共同で持っていたポストなんですけど、そこに、地理の
イニシアチブで人事をやるということになって、石塚さ
ん(石塚道子先生)が来ました。地理学関連教員が8人。
これが一番マックスの人数で、その時に影山(穂波)さ
んと石川(百合子)さん、(地理に)2人助手がいた。

水野：石川さんが人間文化(研究科)の方ですね。影山
さんは学部の方。だから助手が2人いた。

熊谷：私が赴任した時に、その時内藤先生が学科長をさ
れていて、内藤先生と一緒に、当時の学部長(歴史学の
先生)のところへ赴任の挨拶に行ったわけなんですけど、そ
の時に「地理もなかなか大変だから」みたいな話を、い
きなりされたことを覚えています。

水野：お茶大の中の地理学教室の位置付けがあまり良く
なかったという。

熊谷：おそらくは…

水野：力が弱かったんですね。

熊谷：不当に大きな地位を占めているという認識が特に
史学あたりにはあったんでしょうね。それはある意味で
理解できることなのですけども。

教育系の大学であるから地理と歴史が対等なんです。
普通の文学部だったら当然、日本史、東洋史、西洋史、
三つくらい講座があって、それに地理がようやく一つあ
るというぐらいの構成が普通ですね。だから、史学科か
ら見れば、地理ってなんて大きな顔をしているんだ、と
いうようなそういう思いがあったし、あともう一つは、
研究室のスペースが、7階はほとんど地理が占めている
という。これはちょっとアンユージュアルに厚遇されて
いるのではないか、という。

水野：実験系だったからですね。歴史は実験系じゃなか
った。予算が(非実験系)1:(実験系)3くらい。

熊谷：で、実際にその当時学科の再編の話が色々なところ
で進行していて、当時社会学は哲学科の中にあっただ
のですが、宮島(喬)先生が中心ですけども、地理と一緒に
なるような改革案を脳裏に想定していたと思います。
そのような色々な動きがあって、地理学というのがその
まま今まで通りの地理学科として安泰でいられるという
保証はもうない、という状況にあったというふうに僕は

認識したんです。

水野：その時に社会学とくつつく可能性が分岐点として
あったのは面白いですよ。面白いというか、それは実
現されなかったんですけど。

倉光：忘れてましたね。哲学に確かに社会学がありまし
たね。

水野：ええ。それが地理とくつつく歴史的な可能性があ
った。一瞬。

倉光：一瞬(笑)。

熊谷：そういう状況、そういう文脈の中で地理学科をただ
現状維持するっていうこと、現状を守るということを目
的とするは大変な話だというように思ったわけですね。

水野：あの当時は女性教員ってどれくらいいましたか？
周りの学科に。

熊谷：文教全体ですか？

水野：文教の中で、地理の周りで。地理は栗原先生だけ
ですよ。

熊谷：史学も古瀬さんくらいかなあ。だから今よりは少
なかったと思いますね。

栗原さんは初めて地理学科が採った女性教員になりま
すけど、そもそも僕がここに来た縁を作ったのは栗原さ
んですけれども、一橋大学の竹内啓一さんの助手をして
いたんですね。学部卒ですぐに助手として一橋に行って、
僕は竹内さんがインドネシアに行っている間も、自主ゼ
ミみたいなものを竹内ゼミの4年生が開いていたので、
そこに院生、東大(大学院)に行った山本健児さんなん
かも出てきて、当時の4年生が自主ゼミを開いてそうい
うところにも顔を出して、栗原さんが助手としてその研
究会に来ていたので、どっちかというともあ竹内ゼミに
入る前に栗原さんにご縁があったという感じですね。

で、僕が大学院に入る時にちょっと迷ったんですけど、
学部のゼミはあの依光正哲さんという、移民の問題なん
かで本を書いたりしていますけど、その当時一橋大学で
は人口問題という授業を持っていて、その依光さんのと
ころで漁村の社会調査というのを最初にやりました。そ
の時3年生から、最初島根の島根原発の直下にある漁村

を調査して、4年生の時は愛知県の知多半島の先っぽの師崎という漁村があるんですけど、そこを調査し、ここは僕が卒論を書いたフィールドになりましたけど、3年目は銚子に行ってるんですね。僕は留年しているので5年の時に、なんでか(留年したか)というと大学院の試験に落ちたからですね。

その時にそこでフィールドワークというものに最初出会ったんですけど、その上で大学院に入る時にどうしようかと考えると、そのまま漁村の社会調査をするという気はあんまりなかった。日本のことを続けてやろうという気もあまりなくて、それだと行き詰まるというか研究テーマの上で先が見えなくなるだろうと思ったので。まあ途上国、第三世界のことをやりたいと思ったわけですね。最初だからそこで考えたのは、文化人類学か地理学のどちらかだったんです。で、当時一橋の社会学部は、実は社会学部と言いながら、社会学プロパーの教員が1人もいなくて。

水野ほか：え、そうなんですか。

熊谷：大変な詐欺だと思うんですけど。まあそれに騙されたんですけど。僕は社会学をやりたいって一橋の社会学(部)に入ったんだけど、入ってみたら社会学者がいなかった…。まあそこからちょっとボタンの掛違いが起こったんですけども。一番近そうだったのが社会地理学の竹内先生だったという…。さっき言ったように(私が)3年と4年(の専門ゼミを取る時期)に先生がいなかったということで、(大学院では)文化人類学に行くか社会地理学に行くか、もう一回考えるんですね。

文化人類学の方は長島信弘さんという、フィールドがアフリカのケニアで、イギリスの社会心理学をがっちり学んできて、(でも)すごい遊び人で、僕は結局サブゼミとしては出てたんですけども、授業はものすごく厳しくて(自分の指導する)大学院生を、英語の訳しかたを逐一ぼろくそに、凄まじく罵倒するようなそういうゼミだったんですけど。一方でソフトボールとか競馬とか、そういう遊びにも連れて行くような…。両方できないと、長島ゼミってついていけない。だから大体みんな潰れていくんです。あまり生き残った人はいないんですけど。

水野：競馬とかフットボールか何かで本を書いていますよね。

熊谷：『競馬の人類学』(岩波新書)っていう本ですね。世界中の競馬の話を書いているんですけど。最後に自分の(これまでの競馬での)収支勘定を書いていて。これだけブ

ラスだっていうことを書いていて、みんなずっこけるという…。そんな変な人だった。僕は長島さんのところにも一応相談に行ったんですけど、まあ今思えば体よく断られたんだろうと。あんまり(自分のゼミには)向いてないなこいつはと思ったんでしょう。キャラクター的に。まあそれは正解だったと思いますけど。それで結局元の鞘に戻ったというか、社会地理学のゼミに入ったわけですけど。その時の社会地理学教室っていうのが、まあ竹内さんはインドネシアから帰ってきたばかり。それから栗原さんはその前にメキシコに留学に行ってるんですね。助手の時代に1年間留学して、在外研究みたいなかたちをさせてもらったっていうのは、なかなかないことなんですけど。メキシコから帰ってきたばかり。

そしてもう1人入江敏夫さんという、かなりすごい人がいて。ある時期から論文をほとんど書いてないんですけど、日本の地誌をめぐる『地理』の座談会(「日本地誌の課題」地理4(1), 1959年)に出てきて、それを僕は少し紹介してますけど、一番ラディカルに地誌のあり様を批判的に述べていた人なんですね。そういう人がアフリカを中心に講義していたという、そういう雰囲気の話でして。だから第三世界をやると自分がそう決めたところで竹内さんのゼミに出て、栗原さんとか入江さんとかから刺激を受けながら自分の研究をすることができたというのは大きかったと思います。それが栗原さんとの出会いですね。それでまあ声がかかってお茶大にきたということになるんですけど。

水野：あの、ちょっと途中で挟んであれなんですけど、一橋の時に同じゼミとかで女子学生とかはいましたか。

熊谷：何人かいました。大学院生では、ちょっと下に原田ひとみさんがいて、フランス語がよくできて、ノンノの地理学みたいなのを雑誌『地理』に書いてたかな。まあそういう人です。結局研究者にはならなかったけど。

水野：そうすると助手は栗原先生とかその後、田中和子さんとか女性がいて、同級生とか先輩にはちょっと1人2人いるくらいという感じなんですかね。

熊谷：そうですね。まあ助手が女性であるということもジェンダー的な問題ですけど。当時の一橋の助手は女性でした。基本的には事務助手なんですけど、そういうところから自分で勉強して育て(栗原さんのように)研究者になっていった人はいます。

水野：その一橋の学生の時代は、地理学のアイデンティティというの自分としては持ってたんですか？

熊谷：僕自身がでしょうか？一橋の社会地理学研究室っていうのはあまり地理を押し付けないところだったので、そもそも地理学とは何かとか、これが地理じゃないということは一切言わない。基本的には文献を読むゼミが同時多発的に複数走っているという、そういうやり方で。まあ英語のゼミが三つ四つ違う分野の。まあその当時(自分が出ていたの)は、デビッド・スミスの経済地理学、ウェルフェア・アプローチ (*Human geography: Welfare approach*) と、それからその当時のまだ日本にちゃんと紹介されていなかった、humanistic geographyの本、レルフとかトゥアンとかを読んでいました。翻訳がまだ出ていない(時期です)。そういうゼミが複数走っていて。それから第二外国語のゼミが複数あって、ドイツ語、フランス語、スペイン語。スペイン語は栗原さんが担当するというようなかたちで。その中で複数、第二外国語を含む複数の文献ゼミに出ることが一橋大学のゼミのやり方だった。これは学部生も院生も区別しないでやってたんですね。それは実は院生を輩出するという意味ではあんまり多分良くなって。学部生は院生と一緒に文献のゼミに出たりすると、とてもかなわないというレベルの差を感じてしまうので。まあもともと一橋は就職がよいところなので、自分は研究者にわざわざならなくても…と言って就職してしまうという。だから一橋の学部の竹内ゼミを出て、大学院生にストレートでなったのは上田元くん(現一橋大学)が初めてで、彼が非常に優秀な学生で、そういうジinxスを破ったという…。だから普通の地理学教室だったら教えられるであろう、地図の読み方とか、空中写真の実体視だとか、測量だとかは一切なかった。

水野：それと同時に、竹内先生が「それは地理なのか」という質問をまあ禁句にしてたというか、自分の東大の学生時代にいつも聞かれたその質問を自分は絶対にしないようにしよう、という。だからそれは多分似てるのかなあと思うんですけど。そうすると疑問に思うのは、周りにいる講座との間でどういう競争環境にあったのかとか、社会地理学の講座が。今お茶大の地理だったら哲学・歴史・地理それからグローバル文化学環の中に地理があって、そういう競争関係の中にあるわけですね。一橋の場合にどういう競争環境、当然人類学がいるわけですよ、で社会学はいない。

熊谷：はい、社会学はいない。

水野：社会学がいて人類学がいて真ん中に社会地理学がいたらかなりハードな、協力関係も保てるんですけど、かなりハードな競争環境？

熊谷：あんまりそういう感覚はなかったと思いますね。それぞれインディペンデントにやってたという。だからまあ社会学部というのは本当に一匹狼の集まりみたいなところで、学科同士あるいは講座同士で競い合うというような感覚はほとんどなかったと思います。ただ、その竹内さんの仕事に対しては、たとえば長島信弘さんはかなり評価していたし、隣の教室ですけども。そういう個人的に認め合うみたいな、研究者として認め合うみたいな関係はあったと思います。あんまり学生を取ろうとしてなかったからどこも。来なくていい、基本的に。そういう時代だったので、院生が来なかったら困るみたいな意識が全然なかったと思います。

倉光：その、「来なくていい」というのはどういう感覚なんですか？

水野：国立大学だからだと思うんですね。哲学なんか全然ゼロゼロゼロと言っても平然と威張ってたところがあって。

倉光：そんな簡単に学問なんか修められるものじゃないよみたいな感覚なんですかね。

熊谷：一橋の大学院の試験というのは、一次・二次があって。一次は語学、そして二次が専門がだーっといろんな教員の問題がずらっと並んでいて。そのうち二つ取るというやり方だったんですね。で、僕は1年目受けた時は一次で落ちました。それは第二外国語ができなかったからなんですけど。

倉光：ロシア語でしたっけ？

熊谷：ロシア語。

水野：はははは。

倉光：なんでロシア語ですかって聞いたら、まずいですか？

熊谷：まあ学部の入試(出願)の時に、あんまりそんなに真剣ではなくて、その当時読んでたドストエフスキー

やトルストイが原語で読めたらいいなあと思って、ロシア語って丸しちゃったのが運の尽きで、全然わかんないっていうか、辞書を引くのもアルファベットがどういう順番なのかわかんなかったり、とりあえず必修の授業を終えたらほっといたんですね。それでまあ当然ですけどうまく点が取れなかったということで、1年目落ちて。まあ2年目では少し勉強して、露文和訳の参考書とか買いながら勉強したんですけど。(二次の)面接の時に面接官が「あなたにとって語学とはなんですか」という質問をしてきて、「何聞いてんだこいつ」と思ったら、「いや実はあなたのロシア語の点が悪いんですけど…」

全員：(笑)

熊谷：それで、「まあロシア研究やるわけじゃないからいいか」という感じで何とか通ったというか…。まあそんな感じの大学院でした。まあだからよく言えば自由で、各自が好きなことをやってたという感じなんですけど。竹内ゼミというのはその中でも、ほかの大学の人も出入りしている。山本健児さんは、学部が一橋で大学院は東大に行って、でも研究会には必ず出てきていたし。早く亡くなっちゃったんですけど礪部啓三さんという、フランスでドクターを取った、ものすごく頭の切れる人、そして水岡(不二雄)さんも出てきていた。まあそういう大学院だったんですけど。水岡さんは竹内さんのゼミ生ですけど、実質的には経済地理学の方に近かったと思います。逆に経済地理学のゼミ生だったけど、礪部さんなんかは社会地理学の方のゼミに出ている。そういう、一橋ってそもそも学部時代から学部を超えた授業を取ることを奨励される場所なんで、すごくインターディシプリナリーな雰囲気のところでした。だからやっぱり(自分は)その影響を強く受けていると思いますね。社会地理学研究室が、そんなに地理を押し付けなかったということと、一橋の学際的な雰囲気に育てられて、そういうところが自分の原点となっている感じがします。

水野：そうすると、たとえばお茶大は伝統的な地理学科の体制なわけですね。どうでした？ここに来た時に、しかも女子大ですから。

熊谷：その前に九州大学を経験していますので…

水野：その前にその話をしておきますか？ ふふふふ。長くなりそうですね(笑)。

倉光：終わるんですか？(笑)

水野：いやあの、目標まで行かなくても。

熊谷：九大地理学教室、まあ何て言ってたかな、地理学研究室と言ってたかな。半講座なんですよ。野澤秀樹さんという教授がいて、助手がいるだけのポストで。普通は教授・助教授・助手っていうのが(大学の)一つの講座なんだけど、まあ新しく作ったので半分しかない。朝鮮史と半分の半講座だから、地位は低かったんですね、世界史や日本史や東洋史や西洋史と比べて。まあそういう中で、本当にたまたまあった人事っていうか、僕の前の助手が初代の助手で岡橋秀典さん。その岡橋さんが(急に)新潟大学に転任するという事になって、その時に野澤秀樹さんは在外研究でフランスにいたんですね。とにかく誰でもいいから後任はいないかという話になって、いろんな人を經由して竹内さんのところに来て。ちょうど僕は修士論文を書き終えて、翌年ドクターの1年の終わり位のところで、いきなり1月位かな。竹内さんから電話がかかってきて、「君、九州に行く気ない？」っていう、いきなり第一声が。「九大から(助手の)話が来てるんだけど、明日返事ください」と。そういう感じで言ってきたんですよ。そし(て赴任し)たら九州大学ってまあ全然違うところで。野澤先生は京大の地理学を出た人なので、都立(大)の助手をしていたということもあって、オーソドックスな地理をきちんと教えようとする志向性がある人だったと思います。で学生たちも、ちょうど僕が行った時の初めての卒論生が堤研二くん(大阪大学)、その下に中島弘二くん(金沢大学)っていう感じのラインナップだったんですけど。学生の方が(地理を)できるんですよ、地図とかちゃんと描ける。(自分は)ロットリングのペンさえ九大に行って初めて買ったっていうので、学生に図の書き方とかを教えてもらう。助手が学生から教わるみたいな感じだったので、なるほど地理とはこういう教育もするんだっていう。教育がメジャーなんだっていうのが九大に行ってちょっと理解をしましたけども。でも九大の助手時代も、結局地理の中で何かやるっていうよりは読書会を、ほかの(講座の)助手の人と組んで、僕が呼びかけて読書会をやりましたね。ほかの考古学の助手とか文化人類学の人とかと一緒にやって。それで最初に読んだのが文化人類学者Clifford Geertzの*Agricultural involution*っていう本なんですけど。その次にRappaport (R. A.)っていう人の*Pigs for the ancestors*というニューギニアのエスノグラフィーをやったんです。考古学の人なんかは関心を持って一生

懸命出てきてくれて、良い研究会になったと思います。
まあ九大でも結局、そういう学際的なことを一生懸命や
ろうとしたという感じです。それが楽しかった。

水野：史学科の中の地理っていう、中でやっぱり歴史と
か考古学とかと繋がらざるを得ないですよ、多分。

熊谷：まあそうですね。向こうの方がはるかに、やっぱ
り考古学なんていうのは伝統がありますから。九大の考
古学ってすごく地位が高い。じゃあえっとそれで話はそ
れでお茶大の…

水野：いえいえ、あんまりぎゅっと曲げなくてもいいで
すけど、時間の関係もあるので、熊谷先生が話しやすい、
話したい内容中心でいいと思いますけど。

熊谷：お茶大の赴任のそこからもう一回話を再スタート
すると、僕が入った4月に、大学院生がちょうどたくさ
ん進学した時だったんですね、それが影山さんと齋藤(元
子)さんと山本佳代子さんと。あと荒木(美智子)さん
と鈴木(英美子)さんこの2人は研究者にはならなかつ
たと思います。5人大学院生が進学するというのはちょ
っと例がなかったことでした。今まではあまりそんな積
極的に大学院生あるいは研究者を育てようとはしてこ
なかつた講座だと思うので、ちょうどその時この5人が
出たというのがやっぱり潮目っていうか節目とかだったの
かなと。地理学科が変わろうとしていたという、そうい
うところに僕がやって来たんだと思います。その影山さ
んが学部の時、卒論ではスカーフの地場産業の研究をや
ったんですけど、ジェンダーのことをやりたいという、
そういう希望を持っていたので、僕が指導教員になって、
港北ニュータウンの研究をして。ジェンダーの地理学の
パイオニアになったわけですけど。その時に僕はジェン
ダーというテーマはすごく大事なテーマだと思っていま
したし、個人的にフェミニズムに関心がありましたので、
社会地理学プラスジェンダーも教えていきたいというふ
うに思っていました。でその時に、『ノーマネー・ノーハ
ネー』(No money no honey)という、アリソン・マレー
というオーストラリア国立大学でドクターを取った女
性の社会地理学者の本をまあ共同で訳したりとか、そ
んなこともしてましたね。それもジェンダーの関心が入
っているものなんですけど、そんなところがスタートです。

まあ開発・ジェンダー論コースがどこから出てきたの
かという僕の記憶では、年代とかは確認しなきゃいけ
ないんですけど、最初にまず学部のその改革みたいなこ

との提案を募られたんですね。

水野：学部は何でそんな改革をしなきゃいけなかつた
んですかね？

熊谷：その当時徳丸(吉彦)学部長だったんですね。徳
丸学部長に僕が当時開発・ジェンダーということテー
マにしたコースの新設っていう案を学部の改革案として
出したという感じですね。その後、徳丸さんは研究科長
になり、平野(由紀子)さんが学部長になった時代に、
大学院の改革案として日の目を見て。それで平野さんと
一緒にまあいろんな教室を回ってこういうコースを作る
ということへの意見を聞いたり、協力を求めるというよ
うなことが起こったんですね。倉光さんが開発・ジェン
ダー論コースの第1期生。

倉光：第1期生です。はい、私。だから大学院は地理と
して受けて入ったら開発・ジェンダー論コースみたい
な。だからあれば、私、熊谷先生が着任された次の年
に入学してるので97年？

熊谷：大体わかりました。96年に開発・ジェンダー論
コースの話がどんどん進んでいて、まあそのいろんな
段取りをして行ったんですけど、その時にまずメンバ
ーを集めなきゃいけないということで、その講座単位
というよりは、一人一人口説いていったという感じ
があるんですけど…

水野：設置審査かけてますよね、人間文化研究科の時。

熊谷：その辺、僕は実はいないんです、僕は。96
年の3月から…

倉光：そうそう、先生、96年の私が卒論書かな
きゃいけないっていう時に、半年いなか
ったんですよ！

水野：はははは。

倉光：確か中国でしたよね？ どっか行
ってましたよね。

熊谷：違う違う、92年から93年までは1
年間中国に行っていた。96年の3月
から9月まではインドネシア～オ
ーストラリア～パプアニューギニア。

倉光：「半年間いないんだよねー」
って言われて。

水野：卒論指導はしてない？

倉光：卒論指導はしなかったんですけど、熊谷ゼミのメンバーが4人いて、その時、うち3人が大学院に行ったんですよ。で影山さんに、先生がいなのにこんなに真面目に自主ゼミやってる学部生初めて見たって褒められました。

水野：はははは。

熊谷：先生がいなかったことが良かったっていう…

水野：はははは。

倉光：すごく褒められました。今思い出して、「そうだ、いなかったわ」って。

水野：影山さん、森本さん自体が、先生がいなくて自分たちで授業やっている最先端の人たちだったんじゃないですか。

倉光：あーでも話は少しずれるんですけど、(お茶大地理の) いいところだなんていうのは、やっぱりお茶大のほかの大学院はそうではなかったっていうのはよく聞くんですけど、足の引っ張り合いがなかったんですね。みんな後輩をかわいがってすごく後輩にいろいろしてくれたから、やっぱりやってもらった私たちの代とかも、すごく後輩に返そうっていうのは伝統としてあってまあ今続いているかどうかわかんないんですけど、それは昔はありました。私が院生の時は。

水野：それはパワーになってますよね。そこの(世代)あたり人数多いですよ、教員になった人。

倉光：結局私なんかはよく地理地理してないって自分のことを言うんですけど。というのは開発・ジェンダー論コースに行ってるので。その時やっぱり地理もあったんですよ、先生。

水野：地理環境学コース。

熊谷：僕が開発・ジェンダー論コースに移籍したことによって、院生も自動的にそっちに配置されたっていう。

倉光：熊谷先生について行く人はそっちに行くみたいで4人大学院を受けて、3人が開発・ジェンダー論コースに行き、1人だけ田宮先生の学生さんだった友達が地理に行ったけど、でも今の学部生が使っているところが院生部屋だったので、あそこを使って、みんなそこで会うみたいな感じだったんですね。

熊谷：96年は、だから僕は最初に開発・ジェンダー論コースの基礎づくりのところはいたんですけど、それがカチとした形になっていくプロセスは知らないんですね。

水野：じゃあ最初の言い出した時にはいたけども、途中はなくて、経過を知らないんですね。

熊谷：一人一人口説いていくということはやったんですけど。その時最初に行ったのは、教育の文化人類学の田中真砂子さん。まあ田中さんはジェンダーのテーマは非常に興味を持っていたので二つ返事みたいなかたちで乗っかってくださった。それからジェンダー研究所の2人(原ひろ子さん、館かおるさん)が、実は僕の認識では最初はちょっと難色を示していました、開発・ジェンダー論コースという課程に。それはおそらく修士…その当時博士の指導はしてたんですね、だけど修士の指導はしてなかった。卒論もしてないんですけど。修士を指導するということの負担はちょっと躊躇したっていうことだったんじゃないかなと思いますけれども。ある時期からはジェンダーという名前が冠されたコースを作るということに積極的になっていったと思います。それともう1人は篠塚(英子)先生という、これは生活政策の経済学の専門家の先生が加わって、それから地理から僕と栗原さん。

水野：6人ですよ。地理から2人で、ジェンダー研究センターから2人で、それから生活政策学から1人、

熊谷：と文化人類学ですね。

水野：だから色々寄せ集めた学際的な集団ですよ。

熊谷：そういう部局を超えたかたちで新しいコースを作るという最初の事例なんじゃないかなあ、お茶大で。それは結構大変な仕事だったわけですけど、まあ平野先生がかなり頑張ったと。あと徳丸さんが後ろ盾になってというようなことですね。

水野：その時から今に至るまで、そのインフラについて裏付けがないわけですよね。ずっと20年位そのままバラバラのまま、だから学際…

倉光：ただ昔は図書館がきれいになったあたり、図書館の裏にジェンダー研究センターがあって、あそこが一つのたまり場。あそこに結構出入りしてましたね。あそこでジェン研の先生たちってある意味面白いくらいアットホームな方たちで。色々イベントが行われるのもあそこだったし、なんかいろいろあるっていうと私はジェン研の人たちと仲良くしていただきました。同世代、地理の学生がいなかったということもあるんですけど、ドクターにあがってから。結構そっちに行ったり地理の方に行ったりしてましたね。生活の方は行かなかったんですけど。

水野：やっぱり身軽な人が多くて、分野がちょっと違ってても交流していて、やる気で何とか保たれている集団というか。インフラとか予算とか制度的なものがあった上で安泰している集団じゃなくて、お互いがこう、何か共同でやろうとする意思だけで繋がっていたのが開発・ジェンダー論コースだと思いますね。だからそれを作れたのはやっぱりお茶大としてはかなりプラスが大きかったように思うんですけど。

熊谷：まあこれがあったから、その当時は開発・ジェンダー論コースは、生活・開発科学系という名前で、人間発達何とかという専攻名だったと思います。今の3コース（生活政策学と地理環境学）がそこに入るっていうようなコースだったんですよね。

倉光：履歴書を書く時にめちゃくちゃ長かったっていうのを覚えています。それまでは文教育学部地理学科で済んだのが、なんかお茶の水女子大学、ですでに長いじゃないですか。大学院、(名前が)長いんですよね。人間文化研究科で発達何とか何とか専攻、生活・開発科学系、開発・ジェンダー論コースと書くと、履歴書の欄に入らないんですよ。それから履歴書を使うこと、止めたっていうのはあります。

熊谷：開発・ジェンダー論コースがそもそもその寄せ集めっていうかな、ほかの異なる部局の共同でできたっていう、それを中核にしてそれを挟み込むようなかたちで生活政策と地理学が共同して三つのコースを作った。三つのコースでまあ生活開発科学系というまとまりができたわけです。開発・ジェンダー論コースを作っていなけ

ればそういうこともなかったらうし。

水野：学部もまたいじったんですよね。

熊谷：はい。そういうジェンダーという名前を冠した、後に専攻が出来る、それからCOE(Center of Excellence)を取ったこととほぼ重なってますけど、それを作った。それにいく最初のきっかけを作ったのが開発・ジェンダー論コースだと思います。

水野：あの開発・ジェンダー論コース自体がそもそも学際的なものでその隣に地理があると、地理って僕の理解だと存在自体が学際的っていうか、それは。ところが隣に開発・ジェンダー論コースがあると、地理学ってすごくディシプリナリーに見えるんですよ。地理学っていうカチッとしたなんかあのディシプリンを持って集まっている古風な集団に見えちゃう。本当は(地理は)学際的なわけですね。存在それ自体が学際的で、開発・ジェンダー論コースは意志あるものが集まっている。明示的に学際的な人たちで、隣にあるもう一つ生活政策(学コース)は社会科学系のそれぞれの分野が一緒になっているので、本当は存在としてはあちらも学際的だった。

倉光：家政学部のやっぱり伝統が凄く強いので。だから学際というと(聞こえは)いいんですけど、第1期生は本当に先生たちとか学問に対する姿勢と考えの違いにことん振り回されて、みんな本当に誰が副指導になる、その学際を喜ぶよりもこの先生が副指導になったら何を言われるんだみたいな…。とにかく最初のショッキングな時代ですよ。

熊谷：開発・ジェンダーの最初の第1期生は十数人いたんだけど…

倉光：12名です。

熊谷：12名のうち(無事修論が)通ったのが3、4人じゃないかな。

倉光：そうですね。

熊谷：あとは全部落ちたのかな。出さなかった人、それから出したけど落とされた人…

倉光：私は一年(留学に)行っちゃったので。

熊谷：これは（自分にとって）凄まじいトラウマになっています。その時僕はコース主任，コース代表だったので。みんなの考えが合わなかった。みんな一家言を持つ人たちだったから，（それぞれの教員が）これはもう認められないみたいなの，そういう判定が下っちゃったんですね。それで落ちた。だから主指導が合格を付けてても副指導の点で落ちたっていうようなケースがあります。だから非常に酷い，学生に対しては酷いことだったんだけど，最初はそういう形がまだちゃんと整ってなかった。形だけができて中身が整っていないのも弊害でした。

まあ開発・ジェンダー論コースはそういうことで，地理学から二つポストを出して，最初栗原さんだったんですけど石塚さんが来てからチェンジして，栗原さんは地理に戻り，石塚さんが開発・ジェンダーのメンバーになったということですね。でそれが大学院の話で。

まあグロ文の話もしましょうか。

水野：そうですね。

熊谷：「グローバル文化学環」を最初に提案したのは2003年だったと思います。僕の資料によると2003年の4月に新総合文化学コースについての試案について僕が書いていまして，この時はまだグローバル文化学環という名前はなくて，多文化共生あるいはグローバルリテラシーというのをテーマにしたコースを作るということでした。その背景にあるのはまず総合文化学コースっていうのが当時あって，水野さんが世話人をさせられてたコースですけど。

水野：僕と平岡先生と2人で学生30人。ほっといても学生が来る。楽なので。卒論書かなくてもいいコースでしたから，これは酷いんじゃないかと。あまりに酷い。本当にその多人数の人をお世話してたんですよ。

熊谷：その時（現在の4学科に再編された時）に，まあそれだけではちょっとなんだろうなあ新しさが足りないと思ったのか，総合文化学コースっていうのを同時にそれぞれの学科に置いたんですね。それは名目上は卒論にとらわれずに自分の好きなことをやってまあ就職活動であれなんであれ，自分の好きなことがやれる，卒論を書かなくても済むコースという自由さを売りにした，あるいは学際性を売りにした。まあ（学科内の）三つ（以上）の専門コースのどこにも所属しないわけだから，どこかそれぞれのつまみ食いでいいので学べる，そういうこ

とを売りにして作ったんですけども，実態はあんまり面倒を見ないで放置するということが評判が悪かった。それで水野さんが苦勞されたと思いますけど，それをなんとかしたいという。このままじゃまずいだらうっていう共通理解はあったわけですね。その枠組みをそのまま使って新しいその総合文化学コースっていうのもっとリニューアルしてきちんと教員が学生と付き合いながら研究していく。そういう学際的なコースにしようというのが発端でした。それは中期目標と関わっていたと思います。文教育学部の。でその時に最初の僕はそういう案を出して，おそらくこの時点では三浦（徹）さんなんかもそれぞれ案を出していたと思います。だから最初から一つではなかったんですね。この時に僕はグローバル化時代に期待される他者理解のための知識と感受性，想像力，実践力を備えた市民となりうるような学生を育成するという今のグローバル文化学環の基本理念を出しています。で2003年に，まあその案を僕と，途中から三浦さんも加わり，学部教授会に提案したんですけども，これは土屋学部長の時で，これはけんもほろろに潰されました。その案はみんな賛成しなかったんですね。まあおそらく新しいコースを作るということはやっぱり定員の持出しとか，教員を奪われるっていうことと，そのコースっていうのが人気が出れば当然（自身の）定員が失われてゆく，自分が今まで持っていた既得権が失われていくということもあったでしょうし，まあいろんな意味であの多数派の文教育学部のディシプリナリーなコースに安住している人たちからは嫌われたということだったと思います。それが2003年のことですね。

水野：その時にインフラもやっぱりあんまり用意されなかったという感じでしょうか？

熊谷：そもそもあんまりインフラをあまり持たないコースという構想で，これは三浦さんがそういうフィジカルなところをかなり考えていたと思うので。そのほかのコースと同じように，教員は専任教員は置けけれども，その助手室…じゃない図書室を持たないと最初から書いていました。それで2004年にもう一度この案が拾われるというか，まあそれをやってみましょうという話になったのは内田伸子さんが学部長になった時で。内田さんはこの総合文化学コースというものをなんとかしたいという気持ちを強く持っていたので，もう一度「グローバル文化学」というコース構想を支持してくれて。それで各学科，各コースにこれをどう思うかっていう話を議論してもらったというかな，それが前期の過程であって。地理

は地理で答申を出していますけれども、その中でおおむね作ってもいいんじゃないかというような話になっていたと思います。それで夏休み中に細かなカリキュラムの議論なんかを、僕はここにはあんまり関わってないですけれども、三浦さんとか宮尾（正樹）さんとか、米田（俊彦）さんが入ったと思います。米田さん（教育学）は最初はグローバル文化学コースに対して否定的だったんですけど、米田さんがどっちかという批判的な立場からカリキュラム構成のメンバーに入ってこられたので、まあ三浦さんももともと実務的な人なので、このあたりできちんと形が出来上がっていったという感じでしょうかね。

その前史をさらに言うと、実は研究会というのをわれわれはやっていて、「アジアから考える」という研究会を三浦、宮尾、それから小風（秀雅）、それから菅（聡子）さんも入ってたかな。そういうメンバーで、これを「総合講座」というかたちで教養の科目として、複数の教員がまとまってテーマでオムニバスでやるってというような授業があったんですね。それをやったメンバーがせっかく集まったので、もったいないということで（その後も）研究会をやっていました。だから、それがグロ文のある意味で前身的な母体になっているというところがあります。これもやっぱり学際性なんですけど、キーワードとしては、そういうことがなければちょっといきなり（グロ文）は構想できなかったのではないかと思います。

水野：グロ文で何か15年記念かなんか、10周年記念のパンフレットありましたね。

倉光：あります。グロ文は結構きちんと記録があります。あの三浦先生がいらっしゃることもあり、かつ熊谷先生も結構記録を残されているので。

水野：なるほどグロ文はたどれるんですね。グロ文になってからはわかるんですね。

倉光：グロ文はたどれるけれど、この研究会の話は今までいろいろ聞いてますが、初めてです。

熊谷：その（グロ文の）最初のメンバーがだから、地理から2人、僕と石塚さんで、史学から三浦さん、その当時篠塚さんが史学に移ってきていた。一回お茶大を辞めて日銀の政策委員になり、それを辞めて文教に戻って、史学科が引き受けたので、史学から2人入れたというかたちだったのですが、それから日本語教育の2人、加賀

美さんと森山さんという6人でスタートしたという感じなんです。まあこれは学際的だけど、開発・ジェンダーを作った時のようなせめぎ合いはあんまりなかったと思います。角を突き合わせるようなことはなくて、割と仲良くやれたんじゃないかなと思いますけどね。

水野：結局グロ文を作ることで、複数プログラム制というのがそこから派生して出てきたし、まあ複数プログラム制のモデルはグロ文ですよ。それとあと「グローバル女性リーダー」という大学のキーワードですね。お茶大の中期目標に掲げているそののなんていうか実績というか、それに書き込める講座というかコースを持っていたというのはお茶大にとっても大事だったのかなという感じですよ。それまでは（お茶大が）グローバル（にやっている）と言えなかった。

熊谷：「グローバル」というカタカナの名前をつけたことがまあ一つポイントかな。まあ国際という言葉は使い古されてたんですけど、やっぱり僕あの見るところ文教育学部っていうのは、老舗のそれぞれディシプリナリーな講座／旧学科が、それぞれ丁寧に学生を教育するところが売りの学部だったと思うんですね。けどその中では掬いあげられないようなテーマとか関心というものはやっぱりあって、それは総合文化学コースでは十分実現できなかった。そういうニーズはあるという認識でいたので、そういうスペースを作ることで、今まではあまりお茶大あるいは文教育学部に入ってこなかったような学生も含めて、惹きつけられるんじゃないかという思いがあって、それは成功したと思います。あともう一つ、学部としてはグロ文を作ったことでほかの講座は逆にディシプリナリーな今までのやり方を続けられたっていうか、グロ文を作ったということが一つのリニューアルで、それぞれの講座の専門性っていうのが保証されたということになったんじゃないかなと思いますけど。

水野：あの、もうちょっといろいろ深められればいいんですけど時間的にはあと5、6分ぐらいなので、ほかになんかありますか。今の内容じゃなくてもいいです。

久島：今の話を聞いてて思ったのは、グロ文ができたことによって既存の教室のディシプリンが強まったというか、何かこうなんてこう独自性というものが発揮できたみたいなことおっしゃったと思うんですけど、私はお茶大の地理学っていうのはすごくよかったなあと今最近、余計強く思うんですけど、やっぱりすごくインターディ

シプリナリーっていう雰囲気育ててもらったんだなあって思っていて、その私の時は石塚先生とか栗原先生とか水野先生とかおられたんですけども、お話聞いてて思ったのが私の感覚では、あんまり「地理学」ってすごくこう教わった感覚って全然なくて。

熊谷：いいことか悪いことかわかんないけど…

久島：今それで苦労してるところもあるんですけど、でも、もしかしたら今のグロ文に雰囲気が近かったのかなあって思ったんですね。

熊谷：どうだろうね、グロ文と地理って僕は連続してると思うし、僕自身がやっていることは変わらないので、フィールドワークに根差した研究っていう意味ではもともと地理もそうだし、グロ文の中でも言っていることは全然変わらないんですけど、研究対象としてわりと国内でドメスティックにやるか、それともうちちょっとインターナショナルにやるかっていう指向性の違いっていうのはあるかもしれない。そのくらいでしょうかね、逆に言うと、で、僕はあの地理の巡検、大巡検というのを本当は海外でやりたかったんですよ。一回提案したことがあるんですけど、必修だからやっぱり海外ってお金もかかるし、行けない人もいるだろうということとちょっと無理だろうと言われたんですけど、それなら海外の実習ができるようなプログラムを作りたい、というような思いがありました。

久島：なので、お茶大の地理学ってグロ文ができたことでできたんじゃないかなあって思うんですけど、それでもグロ文っていうものが必要だったのかなあって…

熊谷：まあだからそれはやっぱり僕としては予想外だっ

たのは、グロ文を作った後に（地理から）2人抜けた（内田忠賢さんと杉谷隆さん）。人員の減少が起ってしまったのはちょっと予定していなかった。それから僕としてはグロ文は地理の延長線上にできたんじゃないかという気持ちもわからないではないんだけど、もう少し柔軟に、たとえば学部の卒論生にいろんなことをやらせて、まあそういう人が大学院で地理学を選んでくれたらいいなというふうに思っていたんですね。だから地理学コースから来る学生とグロ文から来る学生との両方が地理環境学コースの院生になるというようなかたちで、むしろ地理学が多様化していくっていう、そういうルートがある可能性があるんじゃないかというふうに思いました。

水野：あと4分ですね。じゃあちょっとやっぱりまだ時間がちょっと足りなかったですね。最初の方を中心になりますけど大丈夫ですかね？

倉光：聞きたかったことは聞きましたので、後半はちょっとツッコミが足りなかったんですけど。

熊谷：もしあれだったらメールのやり取りで補足をします。

水野：じゃあいいですか。あの長時間になりましたけども、熊谷先生とそれから2人もどうもありがとうございました。

くまがい・けいち（基幹研究院・人間科学系）

みずの・いさお（基幹研究院・人間科学系）

くらみつ・みなこ（基幹研究院・人間科学系）

くしま・ももよ（愛知工業大学・地域防災研究センター）

Conversations with Professor Keichi Kumagai